

黒部ルート開放による立山黒部観光エリアへの効果

Effects on the Tateyama-Kurobe tourism area by opening "The New Toyama Unazuki-Kurobe Dam Route"

まちづくり/論文

地域キュレーションコース

道正 成美

Narumi Doshō

◎はじめに

「黒部ルート」とは、関西電力株式会社(以下「関西電力」という)が管理し、黒部ダムと黒部峡谷鉄道の端部である樺平駅をつなぐ工事専用軌道で、黒部ダム建設時に資材の運搬用につくられた。黒部ルートによって立山黒部アルペンルートと黒部峡谷鉄道が一つのルートとしてつながれば、周遊性が得られ、立山市、黒部市それぞれの観光資源の魅力が一層高まることが期待されており、2024年に「黒部宇奈月キャニオンルート」の名称で一般開放されることが決定した。



図1 黒部ルート地図

黒部ルートHP / <https://unazuki-kurobedam-route.jp/routename-boshu>

◎黒部ルート開放に至る歴史

富山県議会の会議録閲覧サイトより、関連する発言をもとに黒部ルート一般開放までの動向を三つの時期に分類した。

【第1期 1956年～1996年 始動期】

1956年の黒部ダム着工から、40年もの間黒部ルートは人々の目に触れられずにいたが、1996年の定員1000人とした公募見学会の開始を契機に、一般開放への道が開かれた。しかし富山県政と関西電力との黒部ルートに対する意識は大きく異なっており、すぐに次の展開へ進むことはなかった。

【第2期 1997年～2017年 停滞期】

この期間には公募見学会の継続的な開催と見学会の充実化を図るための取り組みがみられたものの、ルートの安全性確保が定まらず、一般開放の確定にまではこぎ付けられていない。しかし、黒部ダム着工時に関西電力と厚生大臣の間で交わされた、黒部

ルートを公衆の利用に供することについての誓約書に関わる議論が行われたり、関西電力の社客枠の扱いについて議論されるなど、県も強い姿勢を見せるようになった。また、2015年の北陸新幹線開業を機に、富山県政は観光に力を入れ始め、黒部ルートの産業観光としての可能性についても指摘され始めている。

【第3期 2018年～ 再始動期】

2018年10月に関西電力は富山県との協定を締結し、ついに黒部ルートの一般開放・旅行商品化が決定した。協定の締結以降は旅行商品の充実化に向けた議論が重ねられ、一般開放の準備が進んでいる。

◎黒部ルートの産業観光としての可能性

黒部ルートは利用人数が年間最大1万人という限られた人数であることの希少価値の高さから、プレミアムな商品としての方向性が示されてきた。また、黒部ルートは国家的電力事業プロジェクトの歴史を学ぶことができるという点ですぐれた産業観光であるといえ、富山県の70年来の懸案事項であったことから、その話題性は決して低くはない。しかし、ルート開放の期待とともに周辺地域に対する関心が高まっているとは考えにくい。2017年より富山県の主導で開催されている『立山黒部』世界ブランド化推進会議では、黒部ルート一般開放を含めた28のプロジェクトが推進されているが、これらはルート周辺の既存観光地との連携についてはあまり触れられておらず、黒部ルートの旅行商品化においては、黒部ルート上の資源を活かすためのガイドやコース設定等旅行商品の充実化を重視されている。

◎結論

本研究をもとに言えることは次の三つである。①黒部ルートは周遊ルートとしての位置づけとしてよりも産業観光として貴重な体験を提供する価値を持った観光資源である。②黒部ルート一般開放に向けてより重点的に行われているのは旅行商品の充実化である。③黒部ルートの一般開放は、今のところ立山黒部観光エリア全体の活性化には直接的には波及していない。

長年の期待が込められたプロジェクトである黒部ルート一般開放の効果を周辺地域にも波及させ、話題性の絶えない立山黒部観光エリアとなることを期待したい。